

活用小規模的教學平台進行日語教學之研究計畫
—「線上授課」與「面對面授課」
日語學習狀況的資訊共享分析—

佐古惠里香

流通科學大學商學院特聘專任講師

山内信幸

同志社大學文化情報學院教授

摘要

本論文基於「線上授課」與「面對面授課」的實務研究案例，以大一新鮮人的國際留學生為教學對象，進而分享研究見解，旨在活用 ICT，設計「面對面授課」的教學教案。具體而言，本研究結果顯示：透過具備資訊共享機能的線上工具進行日語教學，別具教育意義。此外，根據「線上授課」與「面對面授課」的資訊共享學習狀況，分別進行各一次的意識調查與分析。調查回饋顯示，課程中採用線上工具對日語學習者來說接受度高，因此本研究結果顯示：即使「面對面授課」，使用具有資訊共享功能的線上工具作為教學互動平台，能實現同儕學習的效果。

關鍵詞：第二語言習得研究、日語教學、活用 ICT、留學生職涯輔導、同儕互評(Peer Response)

受理日期：2024 年 03 月 10 日

通過日期：2024 年 05 月 24 日

DOI：10.29758/TWRYJYSB.202406_(42).0004

**Proposal for Small-Scale Educational Platform
Operation in Japanese Language Classes :
Analysis of Information-sharing on Learning Progress
in Online and Face-to-Face Classes**

Sako Erika

Lecturer, Faculty of Commerce,
University of Marketing and Distribution Sciences

Yamauchi Nobuyuki

Professor, Faculty of Culture and Information Science,
Doshisha University

Abstract

This study aims to use Information Communication Technology in the face-to-face class designing based on practical findings in online and face-to-face classes for international students in their first year of university. First, we pointed out the educational significance of adopting online tools with information-sharing functions in Japanese language classes. Next, we analyzed two attitude surveys regarding sharing information on learning progress in online and face-to-face classes. Based on the responses obtained, we argued that learners of Japanese more readily accept online tools and that the use of online tools with an information-sharing function as a platform in face-to-face classes can become an alternative method to substantiate peer learning among learners.

Keywords: Second Language Acquisition, Japanese-language Education, use of ICT, Career Education for International Students, Peer Response

日本語授業における
小規模な教育プラットフォーム運用の提案
ーオンライン授業と対面授業における
学習状況情報共有の分析ー

佐古恵里香

流通科学大学商学部マーケティング学科特任専任講師

山内信幸

同志社大学文化情報学部文化情報学科教授

要旨

本稿は、大学初年次の留学生を対象としたオンライン授業と対面授業における実践的知見を基に、対面授業デザインにおける ICT の活用を目指す研究である。具体的には、まず、情報共有機能を持つオンラインツールを日本語授業で採り入れることの教育的意義を指摘した。次に、オンライン授業と対面授業において、学習状況の情報共有に関する2回の意識調査を実施・分析した。得られた結果から、日本語学習者に、オンラインツールが受容されていることや対面授業においても情報共有機能を持つオンラインツールをプラットフォームとして使用することで、学習者のピア・ラーニングを実質化する可能性を主張した。

キーワード：第2言語習得研究、日本語教育、ICTの活用、
留学生のキャリア教育、ピア・レスポンス

日本語授業における 小規模な教育プラットフォーム運用の提案 ーオンライン授業と対面授業における 学習状況情報共有の分析ー

佐古恵里香

流通科学大学商学部マーケティング学科特任専任講師

山内信幸

同志社大学文化情報学部文化情報学科教授

1. はじめに

本稿は、大学初年次の留学生を対象としたオンライン授業と対面授業における実践的知見を基に、対面授業デザインにおける ICT¹の活用を目指す研究である。具体的には、まず、理論的観点から、佐古・山内（2024）によるオンラインツール種類別利用法を用いて、情報共有機能を持つオンラインツールを日本語授業に採り入れることの教育的意義を指摘する。次に、オンライン授業と対面授業において、学習状況の情報共有に関する2回の意識調査を分析する。第1回目は、オンライン授業を受けた日本語学習者（66名）に学習計画に関するアンケートを実施して、情報共有機能を持つオンラインツールをどのように対面授業デザインに採り入れていくのかについて、検討する。第2回目は、対面授業を受けた日本語学習者（30名）に、学習計画に関する意識調査を行い、6段階で評価をさせて、得られた回答を分析する。総括すると、オ

¹ 総務省の用語解説ウェブサイト（<https://www.soumu.go.jp/denshijiti/ict/data/3.html#ict>）によると、ICTとは「Information and Communication Technology」の略。情報（information）や通信（communication）に関する技術の総称。日本では同様の言葉としてIT（Information Technology：情報技術）の方が普及していたが、国際的にはICTがよく用いられ、近年日本でも定着しつつある。」と定義されている。

ンライン授業と対面授業の実践的知見から、オンラインツールを用いた学習情報共有の場を提供することによる学習効果（ピア・リスポンス）などを踏まえて、初年次留学生の日本語クラスの授業デザインについて提案する。

2. 先行研究

2.1 研究背景

2024年3月現在、ChatGPTのような大規模言語モデルを用いた作文添削などの試み²が日本語クラスにおいても話題を集めているが、日本語教育分野においても、様々なオンラインツールを活用した新しい授業デザイン作り³が注目されている。一方、大学の講義形態は、コロナ禍（2020年3月から2023年5月⁴）におけるオンライン授業から対面授業に移行しており、コロナ禍以前の2019年頃までの紙媒体を用いた配布物や課題提出という従来の教授法による運用形態に戻ってきている。この移行期に、これまでのオンラインツールの知見をまとめて、対面授業において運用しやすいICT活用の方法を検討することは、喫緊の課題であると考えている。

2.2 オンライン授業下での試みと現在

コロナ禍では、緊急事態宣言や新型コロナウイルス感染症まん延防止等重点措置などの影響により、人数制限や行動制限が実行されたことから、オンライン授業が推奨された時期

² 例えば、寺嶋・稲田・板井・隈井（2023）では、プロンプトによって得られた ChatGPT からのフォードバックを学習者がどのように活用したのかについて報告されている。

³ 本稿では、ICT を活用して実施する授業形態のことを「新規型」と呼び、教科書を読んだり、プリント配布をしたりする伝統的な授業形態を「従来型」と呼ぶこととする。詳細は、3.2 で再述する。

⁴ 本稿では、内閣官房のウェブサイト「新型コロナウイルス感染症対策基本的対処方針に基づく対応」（<https://corona.go.jp/emergency>）を参考に、便宜上、新型コロナウイルス感染症が大学の講義形態などに影響を与えていた期間として、日本の大学で卒業式が不開催となった2020年3月頃から、5類以降となった2023年5月8日までと定める。1回目の緊急事態宣言が出た2020年4月7日以降は、より強い規制が設けられた。

があり、教員は Microsoft Teams（以下、MS Teams）や Zoom などのビデオアプリケーションを用いた授業を余儀なくされた。しかしながら、オンライン授業は、対面授業と異なり、学習者の学習状況を把握しにくいことが課題点として挙げられてきた。筆者らは、オンラインツールを工夫して使用しながら、オンライン授業における学習状況の把握に関する実践を試みてきた。一方、コロナ禍後の対面授業においては、コロナ禍における代替案としての消極的な意味での「学習状況の把握」ではなく、教育的意義の観点から、積極的な意味での「学習情報の共有における学習効果」に着目をして、オンラインツールの運用を試みている。

3. 理論的枠組み

3.1 オンラインツールの種類別利用法

総務省（2019）⁵のウェブページ「インターネットの登場・普及とコミュニケーションの変化」などによると、近年の情報通信技術の発達は目覚ましい。世界中で、様々なオンラインツールが登場しているが、多くの日本の大学では、標準的な課題遂行のために、Microsoft 365 や Google Suite などの Office アプリケーションを採用しているところが多い。特に、コロナ禍においては、MS Teams や Zoom などのビデオアプリケーションでのオンライン授業とともに、方（2022）のように、Office アプリケーションのオンライン共有機能をうまく活用している実践研究も報告されている。しかし、セキュリティの脆弱さや購入費用の観点から、実際の教育現場での運用において、新しいオンラインツールの導入は、一時的であり、別の現場における運用の再現性は高くない。例えば、佐

⁵ 総務省（2019）のウェブページ「インターネットの登場・普及とコミュニケーションの変化」（<https://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/whitepaper/ja/r01/html/nd111120.html>）を参照のこと。

古（2023）においては、**Gather** というビデオアプリケーションを使った実践報告を行っているが、学習者はこれまでに使い慣れた **Zoom** などのオンラインツールの使用を好み、初見のオンラインツールの使用は、学習者にとって使い勝手の良いものではないことを指摘している。一方、**Microsoft 365** や **Google Suite** などの代表的なオンラインツールを使用している実践研究は、比較的汎用性が高いと思われる。このような一般的で汎用性の高いオンラインツールを用いることで、日本語教育に興味のある人には誰にでも十分再現可能であり、気軽に運用・提供できる。

オンラインツールの利用利点に関しては、例えば、佐古・山内（2024）では、既知のオンラインツールの種類別利用法がまとめられている。表 1 は、佐古・山内（2024）のオンラインツールの種類別利用法を引用したものである。

表 1 オンラインツールの種類別利用法（佐古・山内 2024）⁶

特徴		具体例	
タイプ	目的別分類系	代表的なオンラインツール	特徴
同期	ビデオ配信	Zoom 、 MS Teams 、 G Meet	ビデオ会話が分割された画面上で行える。
	コミュニケーション促進	Gather 、 SpatialChat	アイコンやアバターを動かし、相手に近づくことで会話ができる。
非同期	情報共有	・ MS OneNote （ノート機能） ・ G Jamboard （ホワイトボード機能） ・ Slack （総合機能）	文字入力、動画や音声や画像を挿入することができる。情報の共有機能がある。
	練習問題作成	G Forms 、 MS Forms	練習問題を作成できる。
	学習補助	ChatGPT 、 MS Bing	作文の添削やイラスト作成することができる。

本稿では、佐古・山内（2024）の分類に沿って、**Google Jamboard**（以下、**G Jamboard**）や **Microsoft OneNote**（以下、**MS OneNote**）などの情報共有機能を持つオンラインツールを「情報共有系」と呼ぶことにする。

⁶ 表 1 内の略称については、**Microsoft Teams** は **MS Teams**、**Google Meet** は **G Meet** とする。その他、**Microsoft** 製品は **MS** とし、**Google** 製品は **G** と記載している。

3.2 従来型と新規型の授業デザイン

本稿では、これまでの対面授業において、黒板に板書をしながら、プリントを配布して、教科書で授業を進めるという手法やパワーポイントのスライドを使い、配布プリントと連動させて実施するような教授法を「従来型」と呼び、クラウド型のオンラインツールを補助的に使いながら、学習者の日本語の理解を深めるという教授法を「新規型」と呼ぶこととする。特に、情報共有が可能なオンラインツールを補助的に使用することで、授業外学習を促したり、学習者同士を繋いだりといったプラットフォーム的な役割を期待することができる。

3.3 ピア・ラーニングとは

このような情報共有のためのプラットフォームが構築されることで、学習者間の交流は、授業中という一時的な対面時間に限定されるだけではなく、情報プラットフォームを通じて、自宅にいながらも交流が広がることが期待できる。学習者同士が、お互いにポジティブな影響を与えあえる可能性が示唆される。このような学習形態は「ピア・ラーニング」と呼ばれており、舘岡（2007）⁷では、以下のような説明が与えられている。

ピア・ラーニングには二つの目的があります。一つは、読解や作文などの課題を遂行することによって、それらのスキルを向上させるという狭い意味での学習の目的です。もう一つは、仲間といっしょに学ぶことによって、人と人との社会的な関係を築き、自分の考えを検討し視野を広げ、さらには自分自身を発見していくという広い意味

⁷舘岡（2007）が引用する「日本語教育通信日本語・日本語教育を研究する第33回ピア・ラーニング」（<https://www.jppe.go.jp/j/project/japanese/teach/tsushin/research/033.html>）を参照のこと。

での学習の目的です。

筆者らは、日本語クラス内で、情報共有機能を持つオンラインツールをプラットフォームとして、学習における補助・補完的な役割を持たせて使用しながら、学習者のそれぞれの情報を共有することで、教員による学習状況の把握だけではなく、学生間のピア・ラーニングとしてうまく機能させる可能性を目指している。

3.4 情報プラットフォームとは

小野・丸山（2001）では、「情報プラットフォーム」について、「情報の生成、収集、蓄積、流通、共有、利用のための共通の場と捉え、その上に様々なアプリケーションが構築され、学術研究や社会の情報基盤として有効に機能するもの」と定義している。現在では、Amazon、Google、Facebookなどが大規模な情報プラットフォームの例である。

一方、大学の授業などに特化しているツールは、G ClassroomなどのLMS（Learning Management System）⁸であり、少人数のクラスにも対応している。しかし、実際の運用では、LMSを使用するための様々な手続きが必要である。大きなシステムを使うことなく、手軽に、オンラインでも情報共有をしたいという教員も存在することから、本稿では、オンラインツールを用いた小規模な情報プラットフォームにおける運用を提案する。必要な情報が集約する場所をオンライン上に作り出すことで、様々な教育効果が期待される。表2は、既存の情報プラットフォームをまとめたものである。

⁸ デジタル・ナレッジのウェブサイト（<https://www.digital-knowledge.co.jp/product/kd/lms/>）によると、「LMSはLearning Management Systemの略で、学習管理システムとも言われます。インターネットやパソコン/スマートフォンで学習を行うeラーニングを実施する際のベースとなるシステムで、多くのLMSでは受講者がログインして学習する受講機能、教員や管理者が受講履歴や成績管理を行う管理機能」からなると定義されている。

表 2 情報プラットフォームをまとめたもの

	大規模プラットフォーム	学習管理システム (LMS)	小規模教育プラットフォーム
例	・ Amazon ・ Facebook	G Classroom	・ G Jamboard ・ MS OneNote
同期タイプ	主に非同期	主に非同期	同期型としても使える。
機能	購買促進を促す	学習管理と支援	情報共有
利点	シンプル	複雑	シンプル

ホワイトボード機能を持つ G Jamboard やノート型セクション管理が可能な MS OneNote を用いた同時情報共有をうまく活用することで、主に非同期型ではあるが、一部の共有機能を使うことで、同期型として使うこともできる。この同期型共有機能は、対面授業の場においても有効であると期待される。

総務省（2016）⁹のウェブサイトによると、「教育クラウドプラットフォーム」の実現を掲げて、実際に、日本の小学校や中学校などの教育現場での ICT 活用を試みている。しかし、このような大規模なシステムを自前で構築しなくても、手軽に、既存のオンラインツールを使って、類似の教育プラットフォームの提案は可能であると考えられる。

4. 実証的検証①：オンライン授業の知見

教育プラットフォームにも様々な種類があるが、本調査では、情報共有機能を持つオンラインツールに着目する。第 4 節と第 5 節では、学習状況に関する情報共有を共通のテーマとして、オンライン授業と対面授業における情報共有機能を持つオンラインツールを用いて、それぞれの実践を比較する。

4.1 第 1 調査の概要

まず、第 1 調査では、Google 社の提供するオンラインツ

⁹ 総務省（2016）のウェブサイト「教育クラウドプラットフォームについて」（https://www.soumu.go.jp/main_content/000411858.pdf）を参照のこと。

ル“G Jamboard”を用いて、「今学期の目標」を立てさせて、オンライン上で、学習進捗状況をクラスメイトと共有させた。情報の種類と情報の受容量についての比較のために、A 群と B 群では、ワークシートの内容を一部変えている。例えば、A 群では週替わり形式を採用しており、B 群では日替わり形式を採用している。以下、図 1 と 2 は、実際に授業で使用したワークシートである。

項目	あなたの予定	実際にしたこと (あなたが教えた内容を記録してください)
6月13日の週		
6月20日の週		
6月27日の週		
7月4日の週		
7月11日の週		
7月18日の週		

図 1 A 群のワークシート
(シート A)

この日の目標	月	火	水	木	金	土	日
5	6	7	8	9	10	11	
12	13	14	15	16	17	18	
19	20	21	22	23	24	25	
26	27	28	29	30	31	1	
2	3	4	5	6	7	8	
9	10	11	12	13	14	15	
16	17	18	19	20	21	22	
23	24	25					

図 2 B 群のワークシート
(シート B)

4.2 調査手順

まず、2022 年 6 月 13 日と 12 月 5 日に、「今学期の目標」に関する授業を実施した。次に、被験者には、授業期間終了後である 2022 年 7 月 27 日 (A 群) と 2023 年 1 月 30 日 (B 群) に、簡単なアンケートを実施した。

質問内容は、「(1) 出身」、「(2) 年齢」「(3) あなたの第一言語」、「(4) あなたは、日本語以外に話せる言語がありますか。そのレベルは、どの程度ですか。」、「(5) あなたの日本語能力を教えてください。」、「(6) 大学に入学する前に、あなたが正式な学校で日本語を学習した期間を教えてください。」、「(7) 今学期の目標を設定したことは、日本語の勉強の役に立ったと思いますか。(6 段階評価)」、「(8) その理由を教えてください。」とした。また、被験者

が回答したくないものについては、無回答を可とした。

4.3 被験者の属性

被験者は、全員、関西地域の大学 1 年次の留学生で、まず、A 群は 33 名で、その内訳は、中国（29 名）、韓国（2 名）、インドネシア（1 名）、シンガポール（1 名）であった。日本語能力については、全員が N2 以上の能力を有していた。年齢（全員回答）の中央値は 21 歳で、平均値は 21.55 歳で、標準偏差は 2.18 であり、被験者グループは中国出身者が多い 21 歳前後の男女であった。次に、B 群の被験者は、33 名で、その内訳は、中国（27 名）、韓国（5 名）、ベトナム（1 名）であった。日本語能力については、全員が N2 以上の能力を有していた。年齢（30 名回答）の中央値は 21 歳で、平均値は 21.89 歳で、標準偏差は 1.93 であり、被験者グループは中国出身者が多い 21 歳前後の男女であった。A 群と B 群における日本語能力と年齢について、それぞれ統計ソフト R を用いて、*t* 検定 (*t.test*) を実施したところ、有意な差は見られなかったことから、両群は、ほぼ同等の日本語能力を有しており、ほぼ同じ年齢の集団であると判断した。また、国籍¹⁰については、本調査にあたり、被験者における中国出身者に属性の偏りが見られるが、両群における中国出身者の母比率の差の検定 (*prop.test*) においては、有意差は見られなかったことから、両群における国籍の属性の割合も、ほぼ同等の集団であると判断した。

4.4 目標設定ワークシート

ワークシートでは、両群とも、「今学期の目標」を設定させて、最終日に「うまくいった点」と「うまくいかなかった点」を書かせて、「振り返り」からの内省をさせるというタスクを与えた。まず、図 1 は、学習者には、週の目標と実際

¹⁰ なお、分析と考察において、被験者の国籍は、中国に偏りがあることと被験者数が少ないことは、今後の課題としたい。

に毎週したことを簡単に（箇条書きなどで）記述させるというタスクを与えた。次に、図 2 の B 群では、毎日何をしたかを記述させるというタスクを与えた。また、B 群のシートには、小さな改訂として、（1）教員の確認チェック欄、（2）内省項目（どうすればうまくいったかを考えさせる）、（3）スケジュールの形式（週刊→日刊）の 3 つを加えた。

4.5 データの評価方法

7 つ目の質問項目においては、評価に必ず偏差が生じる 6 段階評価¹¹のアンケート調査を用いた。評価者には、その評価を選んだ理由も記入させた。また、8 つ目の質問項目においては、川喜田（1967）の KJ 法の発想を用いて、コメントの分類を実施した。

4.6 アンケート評価の分析

統計解析ソフト R を用いて、質問 7 における A 群と B 群の各評価点について、 t 検定（関数 $t.test$ ）を実行した。表 3 は、それらをまとめたものである。

表 3 A 群と B 群の各評価点における t 検定結果¹²

	人数	中央値	平均値	標準偏差	分散	p 値	効果量
A 群	33	5	5.24	0.66	0.44	0.0088	0.67 (medium)
B 群	33	5	4.68	1.02	1.04		

得られた結果の p 値は 0.0088 で、効果量（*Cohen's d*）は 0.67 で中であり、両群には有意な差が見られた。3.3 節で示したように、両群の属性はほぼ同じであることから、シート内容が評価点に影響を与えたと判断した。

4.7 コメントの分析

次に、学習者のコメントを分析する。コメントの分類は、

¹¹ 評価尺度は、「全然そう思わない：1」、「そう思わない：2」、「あまりそう思わない：3」、「まあまあそう思う：4」、「そう思う：5」、「とてもそう思う：6」である。

¹² 小数点第 2 以下は四捨五入している。

日本語母語話者 3 名が行った。意見が分かれた場合には、多数決を採用して、判断をしている。表 4 は、コメントを分析してまとめたものである。

表 4 A 群と B 群コメントの分類と割合¹³

肯定・否定	コメント内容	A 群	B 群
肯定	目標達成できた、目標達成の役に立った	30.30%	
	勉強になった	33.33%	12.12%
	言葉や単語をたくさん覚えた	9.09%	6.06%
	勉強の方向付けができた	3.03%	33.33%
	成長を感じた	3.03%	
	役に立った	6.06%	6.06%
どちらとも いえない	勉強したが、目標達成できなかったが、がんばったと思う	3.03%	12.12%
否定	勉強にならなかった	3.03%	
	勉強したが、目標達成できなかった	3.03%	6.06%
	きちんとしたが、まだまだと思う	3.03%	3.03%
	計画を立てることが好きではない		12.12%
	うまく続かなかった		9.09%
その他	コメントなし	3.03%	
	合計	100.00%	100.00%

まず、A 群において、肯定的なコメントは 84.84% を占めた。どちらともいえないは 3.03% で、否定的な意見は 9.09% で、その他が 3.03% となった。一方、B 群において、肯定的なコメントは 57.58% で、どちらともいえないが 12.12% で、否定的なコメントが 30.30% を占めた。A 群と B 群におけるコメントの肯定・否定の割合における比率検定 (*prop.test*) を実施したところ、*p* 値は 0.029 で、有意な差が見られたことから、A 群と B 群におけるコメントの内容が異なっていると判断した。例えば、A 群のコメントにおいては、「目標があって、勉強の意欲も上がりました。」などの目標や勉強について肯定的なコメントが多かったが、B 群のコメントにおいては、「課

¹³ 小数点第 2 以下は四捨五入している。

題はいつ提出すべきなのか、時間をどうやってアレンジすべきなのかがわかりました。」などの具体的な行動の記述が見られた。自分自身の頑張りを評価する一方、目標は達成できなかったと振り返っている内省的なコメントも見られた。

4.8 目標設定ワークシートのデザインについての考察

まず、両群における学習者のアンケート評価（質問 7）には、有意差が見られたことから、ワークシートの内容が影響を与えていると推察する。具体的には、記述量が多い B 群の日刊シートは、学習者の負担になっている可能性が想定される。一方、A 群における週 1 回程度の振り返りを書かせたことは、学習者の負荷が少なかった可能性があるが、記述の量については、慎重な判断が必要と判断する。また、B 群においては、学習状況把握をするために、目標設定シートの進捗状況の確認として、3 回チェックしたことも、評価平均点に影響を与えたと推察する。しかしながら、両群とも、6 段階評価の中央値は 5 であることから、半数以上の学習者は、質問 ⑦を肯定的に捉えていると判断する。また、B 群において、書き込む情報の量は多くなったが、中央値が 5 ということから、半数以上の学習者はシート B を受け入れていると判断する。但し、B 群の標準偏差は、A 群のそれに比して大きいことから、シート A の方がより受容されていると推察する。

4.9 学習者のコメントの考察

次に、肯定的なコメントの割合における比率検定において有意差が見られたことについて、3 つの改訂点から考察する。

(1) 教員チェック欄は、A 群と B 群において、教員の指導回数が異なる。A 群は、最終日の振り返りのみ、チェックを行っているが、B 群では、合計で 3 回実施している。教師が、オンライン授業におけるオンラインツール上ではあるが、「教員のチェック回数」などの目に見えてわかる形で学習者との交流の機会を作ったことが学習者の行動や意識に影響を与え

ていたと推察する。(2) 内省項目は、B 群において、より踏み込んだ内省を促す項目を追加したことで、こちらもアクティブラーニングにおける内化の効果があったと推察する。(3) スケジュール形式は、B 群において、学習者がどのような力を身に付けたいかなどについて、細かく日刊形式の目標設定シートなどを通じて、明確にしたことで、学習者により深い内省の機会が与えられたと推察する。これら 3 つの改訂点により、シートへの書き込み量やオンラインシートへのアクセス頻度を増やさせたことで、より深く学習者に振り返りをさせる機会を与えたと判断する。また、より丁寧に自分自身の学習状況を見つめ直させた結果、質問⑦（今学期の目標を設定したことは、日本語の勉強の役に立った。）において、B 群の評価平均点が下がったと推察する。A 群と比較すると、B 群においては、肯定的なコメントが減り、内省的なコメントが増えていたと判断する。

結論として、オンライン上に情報を集約することで、教員も学習者も、簡単に、かつ、相互に、学習状況を把握することが可能となる。この「新規型」の教授法は、教員が主導的に関与するという「従来型」の教授法は維持しながらも、一方で、学習者の学習活動を間接的に支援し、学習者集団の自律的な行動や意識に影響を与えていると主張する。これらの知見は、対面授業における授業デザインの再構築につながると考えられる。総括すると、情報共有機能を持つツールを工夫して用いることで、より良い対面授業デザインの新たな提案に繋げることができる。

5. 実証的検証②：対面授業の知見

第 4 節で示したように、情報共有機能を持つオンラインツールは、オンライン授業において、学習者集団の行動や意識に影響を与えることが示されたが、第 5 節では、対面授業に

おける行動や意識への影響について分析・考察する。本節では、MS OneNote を使用した情報共有に関する調査を紹介する。

5.1 目的

本調査は、日本語学習者を対象に、MS OneNote を用いた対面授業における学習計画の情報共有に関する受容を調べることを目的としている。

5.2 調査対象と流れ

調査は、2024 年 1 月 10 日に、G Forms を用いて実施した。参加者は関西地方の大学の留学生（30 名）で、その内訳は、ベトナム（14 名）、中国（12 名）、インドネシア（3 名）、ミャンマー（1 名）であった。全員、大学入学基準である日本語能力試験 2 級相当以上の日本語能力を有していた。

5.3 調査方法

意識調査においては、MS OneNote を使って、オンライン授業 B 群と同じように、毎日の学習について記録をさせた。図 3 は、ワークシートの例である。

The screenshot shows a Microsoft OneNote page with a sidebar on the left containing a list of pages. The main content area is titled '(例) 第1回9月27日～10月3日' and contains a table for daily learning activities. The table has two columns: '日付' (Date) and '何をしましたか?' (What did you do?). The dates listed are 9月27日 (水), 9月28日 (木), 9月29日 (金), 9月30日 (土), 10月1日 (日), 10月2日 (月), and 10月3日 (火). Below the table, there are sections for '(2) ふりかえり' (Reflection) and '(3) 教員のコメント' (Teacher's comment).

日付	何をしましたか?
9月27日 (水)	
9月28日 (木)	
9月29日 (金)	
9月30日 (土)	
10月1日 (日)	
10月2日 (月)	
10月3日 (火)	

図 3 MS OneNote を用いた学習記録の例

MS OneNote は無限ノート型であるので、G Jamboard のように、書き込み分量の制限（1 ページに書ける量）を考えなく

てよいので、学習者によって、書き込み量は様々であった。

その後、学習計画書に関する質問に加えて、紙媒体とオンラインツールを組み合わせた確認方法への受容などに関して、各質問に6段階評価で回答させた。評価と数値の配分は、以下の通りである。「1. 全然そう思わない」、「2. そう思わない」、「3. あまりそう思わない」、「4. まあまあそう思う」、「5. そう思う」、「6. とてもそう思う」である。各質問には、その理由の記述も課した。表5は、質問をまとめたものである。また、質問①～⑧は、その答えを選んだ理由についても、自由に記述させた。

表5 質問紙の内容

分類	番号	質問内容
学習計画	①	あなたは学習計画書の通りに、学習計画を進めることができたと思いますか？
	②	今学期の目標を設定したことは、日本語の勉強の役に立ったと思いますか？
	③	学習計画書で、毎日何をしたかを書いたことは、日本語の勉強の役に立ったと思いますか？
	④	学習計画書で、毎週のふりかえりを書くことで、できなかったことを反省して、次の週に活かすことができたと思いますか？
コメントや声かけ	⑤	学習計画書についての教員コメント（授業での声かけやプリントへのコメント）は、「目標」の達成のために、役に立ったと思いますか？
目標達成	⑥	あなたは、学習計画書の「今学期の目標」を達成することができたと思いますか？
	⑦	あなたは、目標達成のために、学習計画書が、役に立ったと思いますか？
提出形式	⑧	学習計画書は、MS OneNote を使って提出した方がいいと思いますか？
	⑨	「紙の配布プリント」で、毎回語彙リストを作成したことは、日本語の勉強になったと思いますか？
教員チェック	⑩	教員が、紙のノートで、提出物や小テストの点をチェックしたことは、良かったと思いますか？
語彙力	⑪	あなたは、この授業を通じて、日本語の語彙が増えたと思いますか？

5.4 調査分析

質問①～⑪に関して、評価平均値の高い順に並び替えたも

のが、表 6 である。

表 6 オンラインツールの知名度に対する順位（30 名）

順位	質問番号	平均値	最小値	中央値	最大値	標準偏差
1	質問⑤	5.50	5	5.5	6	0.51
2	質問⑪	5.47	5	5	6	0.51
3	質問⑧	5.43	4	5.5	6	0.63
4	質問③	5.43	3	5.5	6	0.68
5	質問②	5.40	4	5	6	0.62
5	質問④	5.40	4	5	6	0.62
7	質問⑦	5.33	4	5	6	0.55
8	質問⑨	5.33	4	5	6	0.61
9	質問⑩	5.30	4	5	6	0.53
10	質問⑥	5.27	4	5	6	0.69
11	質問①	5.20	4	5	6	0.71

質問⑤は、平均値 5.50 で、標準偏差も最も小さかったことから、教員の声かけやプリントへのコメントがモチベーション維持のために役に立っていることがわかった。次に、平均値が高かったのは、質問⑪の 5.47 で、標準偏差も小さく、学習者が日本語の語彙力が向上したと評価していることがわかった。第 3 位は、学習計画書の形式であり、平均値 5.47 で、標準偏差も 0.63 であり、学習者は、オンラインツールを用いて、学習計画書を提出することを受容していることがわかった。11 位は、質問①だが、平均値は 5.20 であり、標準偏差も小さいことから、質問①～⑪について、学習者は、全ての項目で高評価を与えていることがわかった。

5.5 従来型と新規型を結びつける試み

本対面授業の実践においては、従来型のプリント配布や声かけとともに、MS OneNote 上で、毎週の振り返りとしてコメントを付けることを求めた。また、教員は、その振り返りにコメントを付けて返信するようにした。例えば、質問⑤のコメントにおいて、学習者 A は「先生はいつも返事の中で私をほめてくれて、私をもっとやる気にさせました。」と書いて

いた。オンラインツール上であるが、教員のコメントが学習者のやる気を高める効果があったと考えられる。

また、MS OneNote 上だけでコミュニケーションを完結させるのではなく、MS OneNote で学習者が書いた内容について、次の対面授業で「N1 の単語、30 個も覚えたんですね。どんな単語を覚えていますか。」などの声がけに努めた。学習者が書いた MS OneNote 上の学習計画書の情報を基に、1 人ひとりに対面で声をかけることで、MS OneNote に書いたことをオンライン上の作業として終わらせずに、これらが対面授業とつながっていることをより強く意識づけさせるような雰囲気作りを心がけた。これらは、統計的な数値として測定しにくいですが、質問⑤において、学習者の評価平均値（5.50）が高かったことや学習者のコメントを総合的に考えると、「従来型」と「新規型」を結びつける対面授業の試みは、学習者に肯定的に受け入れられていると判断した。

5.6 オンライン授業と対面授業における目標設定の分析

最後に、オンライン授業 A 群と B 群（質問⑦）と対面授業群（質問②）における共通の質問項目である「今学期の目標を設定したことは、日本語の勉強の役に立ったと思いますか？」に関して、統計ソフト R で t 検定 ($t.test$) を実施したところ、オンライン A 群と対面授業群には、有意差は見られなかったが、オンライン B 群と対面授業群には、 p 値は 0.001 で有意差が見られた。対面授業群では、毎日の学習を記録させていたが、週刊記録のオンライン A 群よりも平均値が高かった。対面授業では、毎日の記録が学習者の負担になっていなかったと判断した。

6. 考察

6.1 小規模な情報共有プラットフォームの構築の推奨

第 4 節と第 5 節では、オンライン授業と対面授業において、

G Jamboard や MS OneNote などの手軽な情報共有系ツールを用いた授業実践について報告した。これらの実証的知見は、理論的含意を補強する役割を果たしうる。G Classroom などの LMS のようなシステムを使わなくても、十分に情報共有のプラットフォームとして機能する可能性を示唆している。Devedžic (2006) は、遠隔授業の本質的な要素は、技術インフラ、e-ラーニング・プラットフォーム、e-ラーニング・コンテンツ及び参加者であると主張しているが、2023 年度においては、e-ラーニング・プラットフォームの多様化や発展により、LMS のような役割や機能を担う情報共有系ツールを気軽に使用できるようになった。これらの実証的知見は、今後のクラス運営において、採用されていく可能性を指摘する。

6.2 ICT を活用した双方向の情報共有という点における従来の授業との違い

舘岡 (2007) ¹⁴では、「教師の関心も、『言語のしくみ』から『教え方（教授法）』へ、さらに『教え方』から『学習者の学び方とその支援』へと変遷してきたといえます。」と述べているように、教授者自身の間でも、教授内容の検討から学び方や支援方法の開発へとその関心が移行しつつある。近年では、これらに加えて、学習動機の研究も進み、「学習者の学び方とその支援」から発展して、「学習者の自律型学習」へと変遷している。本研究では、オンラインツールの使用によって、24 時間、自由に学習状況を記録するシートやノートへいつでもアクセスすることができ、かつ、他のクラスメイトの学習進捗状況も確認できるという点で、教員と学生の双方向性が確保されるにとどまらず、学生間においても双方向性を担保することができることから、ピア・ラーニングの実

¹⁴ 舘岡 (2007) が引用する「日本語教育通信日本語・日本語教育を研究する第 33 回ピア・ラーニング」(<https://www.jpf.go.jp/j/project/japanese/teach/tsushin/reserch/033.html>) を参照のこと。

践が期待できることを強調する。また、共有しやすいトピックとそうでないトピックがあるが、本調査では、「目標」や「学習計画」というわかりやすいトピックにおけるワークシートやノートを採り入れたことで、ピア・ラーニングに繋がったと思われる。クラスメイトの目標や進捗から、場面における適切な文法やいい方などの表現方法について、良い影響を受けたというコメントが得られたことから、学生同士によるピア・リスポンスとしての効果も指摘できる。

6.3 ピア・リスポンス効果

授業デザインの中で、小規模型の情報共有が可能なプラットフォームが運用されることで、学習者間の情報共有が活性化することが期待できる。例えば、第5節の質問⑧の自由記述においては、学習者Aが、「皆の学習が見られる」と回答しており、学習者同士の交流が深まっていた証左の1つであると考えられる。定性的ではあるが、このような意見を総括して、本稿での試みが学習者の意識や行動を学習に向かわせたと判断した。

6.4 今後の課題

本稿においては、オンライン授業の知見をまとめて、対面授業におけるオンラインツールの利活用について考察したが、今後は、現実的にどのようなオンラインツールのスキルが社会に求められているのかについて、調査を進める必要がある。特に、文部科学省（2021）が2021年度より開始している「留学生就職促進教育プログラム認定制度」¹⁵などに鑑みて、留学生のキャリア教育に活かすICTの活用に着目して、より実践的な授業デザインを研究していきたいと考えている。

¹⁵ 文部科学省（2021）のウェブサイトの「GIGA スクール構想に関する各種調査の結果」（https://www.mext.go.jp/content/20210827-mxt_jogai01-000017383_10.pdf）を参照のこと。

7. おわりに

本稿では、情報共有機能を持つオンラインツールをどのように対面授業デザインに組み込んでいくかに関して検討した。第1に、佐古・山内（2024）によるオンラインツール種類別利用法を用いて、情報共有機能を持つオンラインツールを日本語授業で採り入れることの教育的意義を指摘した。第2に、オンライン授業と対面授業において、学習状況の情報共有に関する2回の意識調査を実施して、定量的・定性的分析を行った。どちらも、中上級日本語学習者に目標を立てさせて、オンラインツールを用いて学習者同士の進捗状況をいつでも確認できる仕組みを構築することの有用性を指摘した。結論として、オンライン上に情報を集約することで、教員も学習者も学習状況をより容易に把握できたことを指摘し、対面授業においても、情報共有機能を持つオンラインツールをプラットフォーム的に使用することで、学習者のピア・ラーニングを実質化する可能性を主張した。

謝辞

本稿は、2023年12月9日に中国文化大学で開催された2023年度台湾日本語・日本文学研究国際学術シンポジウムの口頭発表の原稿に、加筆修正を施したものである。発表において、貴重なご意見を賜った方々や査読者の方々に、この場をお借りして、深く感謝申し上げる。なお、本研究は JSPS 科研費 23K18959 の助成を受けた。ここに謝意を表する。

参考文献

日本語

小野 欽司・丸山 勝巳（2001）「情報プラットフォームの概念とその技術課題」『National Institute of Informatics Journal』(3)、pp.1-5、<https://www.nii.ac.jp/journal/pdf/03/03-01.pdf>

(2024 年 1 月 20 日閲覧)

Google Jamboard「Google Jamboard: 共同作業に適したデジタル ホワイトボード」、<https://edu.google.com/jamboard/>
(2023 年 2 月 23 日閲覧)

佐古恵里香 (2023)「オンラインツール“Gather”を用いた授業実践—村上春樹作品を課題文としたディスカッションを通じての学び—」『2023 年第 12 回村上春樹国際シンポジウム: 村上春樹文学における「擬態」予稿集』、新北、淡江大学村上春樹研究センター、pp.120-127

佐古恵里香・山内信幸 (2024)「オンラインツールの実践的比較検証の試み—授業デザインにおける ICT 活用の提案—」『国際言語文化学会日本学研究』(9)、京都、京都外国語大学、pp.69-82

総務省 (2016)「教育クラウドプラットフォームについて」、https://www.soumu.go.jp/main_content/000411858.pdf (2024 年 1 月 20 日閲覧)

総務省 (2019)「インターネットの登場・普及とコミュニケーションの変化」、<https://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/whitepaper/ja/r01/html/nd111120.html> (2024 年 1 月 20 日閲覧)

総務省「3.用語解説」、最終閲覧日: 2023 年 1 月 18 日、(URL、<https://www.soumu.go.jp/denshijiti/ict/data/3.html#ict>)。デジタル・ナレッジ「LMS とは (学習管理システム)」、<https://www.digital-knowledge.co.jp/product/kd/lms/> (2023 年 1 月 18 日閲覧)

館岡洋子 (2007)「日本語教育通信日本語・日本語教育を研究する第 33 回ピア・ラーニング」、<https://www.jpjf.go.jp/j/project/japanese/teach/tsushin/reserch/033.html> (2023 年 10 月 1 日閲覧)

寺嶋弘道・稲田栄一・板井芳江・隈井正三 (2023)「ChatGPT

による作文のフィードバックとその活用の試み』『日本語教育方法研究会誌』(30)、東京、日本語教育方法研究会、pp.68-69

内閣官房(2023)「新型コロナウイルス感染症対策基本的対処方針に基づく対応」、<https://corona.go.jp/emergency> (2023年10月1日閲覧)

方斐麗(2022)「コロナ禍における日本語教育の変化—多文化を採り入れた遠隔授業の試み」『2022年応用日本語国際シンポジウム予稿集』、高雄、台湾応用日語学会、pp.42-50

文部科学省(2021)「GIGAスクール構想に関する各種調査の結果」、https://www.mext.go.jp/content/20210827-mxt_jogai01-000017383_10.pdf (2024年1月20日閲覧)

英語

Devedžić, Vladan. (2006). *Semantic Web and Education* (Vol. 12). New York: Springer Science & Business Media.